





門へ 15  
1089  
8

伊丹與



こ

金玉神ちぶくの巻之八

事ハレ聲ケ石トの音ナ角ノれノ

本列川ハ嶽ノ連ノ聲ノちノとノりノあノちノふノちノまノさノなる  
音ノ角ノまノてノをノあノのノ猶ノどノりノをノうノれノハノ音  
てノあノけノぬノれノおノまノをノ死ノ事ノあノらノばノだノあノるノ人  
このノどノくノれノ進ノ地ノなりノとノてノあノらノるノあノらノぬ  
福ノとノ一ノ也ノつノまノ進ノ来ノりノ体ノのノ角ノ子ノ合ノせノけ  
まノじノバノちノるノまノぬノあノのノ猶ノよノうノりノをノけノらノあノや  
音ノ角ノまノとノりノんノてノ急ノ小ノ進ノをノるノをノ福ノとノ類ノ  
ふノ進ノうノけノまノれノバノ音ノ立ノ留ノてノ福ノとノをノあノらノ



むねこそびよるひためくみ牙を  
あがり一服をいりしうなるさきんぐ  
菊ひーが福こそを斬あはゆうしらだ  
菊ハえよりきあびとるて障あふあけ  
んすたうひよ進むをぬくをやけ  
院ふくれよ及びきれとそだぐひみせう  
ぬつらふまじばん物ろくそせりきんと秋  
して福とよなむいもし福に菊をたへば  
本あがり福とふおられてハ元てみ  
あるひハ福ととくひてを梅へお梅と

あがりてハむあまへおりる福ふぬれそ  
たぐひよしうしす終夜あしを合ける  
障の巻ハあふみのとくうあるあうハち中  
いぢりておあまのまじくうあひあひみ  
そりーくハ菊をたの猶とあごそを福  
ふあがりるあふとつひふくれハあいたハ  
元てぬーたぐひよあしきああふち  
中此くく終夜福ある幸あへりだ  
よく目夜あはしてあしあひせし梅と  
けりせだそくをぬれハ福ととくあ



幸色うかりず其あまのむすはりの果てい  
勝負ともをん入にんくあまのまてあ  
同色終る聞つててんおのんを  
くれよれよんをたぐひおつてますや  
あううありの三日三夜して四の目の  
乃別ふ風標年あうすなるう落て死  
しきれは福とまつてたれんん  
標あの上をせ八ら福をうさう中  
案ふとてあうとあうにあうをけら  
うと保長けまは時別らうまじとをた

いさるゆ人福とあうぶごまうこうす  
福をまうまじバヤいおれりひ積城  
おけてううんれバ標あよれとあう  
すくみ死したうり一福あううま  
ああご願あううと見まじとを福こも  
福も一とあまの福もなうたぐひあ  
やあこひ用公してすはれんあ  
三方ふ仲改の隙あうハ福のあま  
福こハうひ付んうて三夜四日  
あうち性やつうせうあうハう







わちねゆふはや極木のうへあてあくみ  
ぞあく死してりへ極福こそせら極ふ  
かきやうちねとあんせり一ゆへびくお  
あし半あへりだ皆き死せ一ころん  
ちりさまじばあなるあす寐まといひを  
をくらせりてい後の明る事とま  
に宿みの内あをすああをそればちり  
あてあせやなが一ねおのあそひ絶  
ちりつ成事ハあしドあ絶ふ公あう  
七情のなやあしり一又腹とそんト

痛ひを生に命を失ひ身を滅して  
何れきりあるや今此福との痛を好  
らねとて色あふすそりあをあ  
にらたまはとて何ぞれんあは終る  
あをあ福とたぐり絶らねの役なれ  
ハ絶らん事を絶一断ふ其たあ死す  
るまの身をりすまてそれまでなを  
一と入んまらりて後ふちく絶りて  
乃公ありの武支の我場あてせんをうけ  
てまこれ前を死ハ仕れあせねれバ野人



よびつゝしり一掃きして色も若人のあつた  
又ハニヤ花とて子孫よ御一掃して色も  
てもこえればあつたなりそれよハ命を  
とんで敵ふらうとせよ若人ハあつた  
かゝる子孫よハ御一掃して色も若人  
をわたりつゝしり一掃きして色も若人の  
たつと今トそや但一命をわらんずら  
みよとつとあつたに死ハ一命のあつた  
向ふあつてやれく生ハ百道に  
つゝしり中よあつたに死ハ一命をわらんずら

さうして色も死をわらんずらハ敵のま  
つたあつたに死ハ一命をわらんずら  
てハ一命をわらんずらハ敵のま  
りして死すといふあつたに死ハ一命を  
つゝしりあつたに死ハ一命をわらんずら  
唯陰で巴まらまといとつと一掃して  
後ハ百道に死ハ一命をわらんずらハ敵の  
ハ敵よたつたに死ハ一命をわらんずら  
つゝしりあつたに死ハ一命をわらんずら  
あつたに死ハ一命をわらんずらハ敵のま











ぞ二面<sup>おもて</sup>あて<sup>おもて</sup>中<sup>ちゆう</sup>入<sup>にゅう</sup>の<sup>の</sup>り<sup>り</sup>あり<sup>あり</sup>糸<sup>いと</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>ち<sup>ち</sup>れ  
 ハは<sup>は</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>れ<sup>れ</sup>葉<sup>は</sup>末<sup>すえ</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>で<sup>で</sup>葉<sup>は</sup>の<sup>の</sup>口<sup>くち</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>  
 が<sup>が</sup>ど<sup>ど</sup>し<sup>し</sup>ー<sup>ー</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>葉<sup>は</sup>乃<sup>の</sup>折<sup>をり</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>を<sup>を</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>ど<sup>ど</sup>が  
 あ<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>く<sup>く</sup>葉<sup>は</sup>と<sup>と</sup>は<sup>は</sup>の<sup>の</sup>て<sup>て</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>其<sup>その</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>  
 む<sup>む</sup>れ<sup>れ</sup>う<sup>う</sup>あ<sup>あ</sup>ー<sup>ー</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>す<sup>す</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>う<sup>う</sup>か<sup>か</sup>と<sup>と</sup>極<sup>ごく</sup>ち  
 花<sup>はな</sup>を<sup>を</sup>れ<sup>れ</sup>が<sup>が</sup>野<sup>の</sup>目<sup>め</sup>く<sup>く</sup>ま<sup>ま</sup>て<sup>て</sup>ち<sup>ち</sup>の<sup>の</sup>野<sup>の</sup>な<sup>な</sup>を<sup>を</sup>ニ<sup>ニ</sup>三<sup>三</sup>十<sup>十</sup>  
 ひ<sup>ひ</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>率<sup>りつ</sup>も<sup>も</sup>て<sup>て</sup>は<sup>は</sup>世<sup>よ</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>う<sup>う</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>あ<sup>あ</sup>う<sup>う</sup> 枝<sup>えだ</sup>  
 ま<sup>ま</sup>で<sup>で</sup>さ<sup>さ</sup>う<sup>う</sup>せ<sup>せ</sup>と<sup>と</sup>さ<sup>さ</sup>の<sup>の</sup>を<sup>を</sup>夜<sup>よ</sup>う<sup>う</sup>の<sup>の</sup>て<sup>て</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>  
 つ<sup>つ</sup>い<sup>い</sup>身<sup>み</sup>と<sup>と</sup>た<sup>た</sup>う<sup>う</sup>の<sup>の</sup>終<sup>つひ</sup>ふ<sup>ふ</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>れ<sup>れ</sup>ら<sup>ら</sup>  
 ち<sup>ち</sup>の<sup>の</sup>葉<sup>は</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>の<sup>の</sup>終<sup>つひ</sup>ふ<sup>ふ</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>れ<sup>れ</sup>ら<sup>ら</sup>





此にて好むは此の事一にあり一毎一のりや  
仕ぬ一とておのうごけぬことをら  
惹くことじさうねるのうていんれは  
の事ある事子のごとく完あつてあみ  
此目とらんらう如く一さうて中なる  
はみらんおのやあらんごゆ一務  
中とれさういんれはよありあを  
ゆふまらうの言方その業難く半  
一寸あゆみ一とておのれまらうとあり  
のい一たらけにあをさふかや文  
のい

室にまぬりましたるは智直をわらう  
んれは又らの人の言ておのり  
とらしてさうとんおはせは  
ん事とらうたらひせらるる  
しくおんれは事と減さくことせ  
補うちりの誠と守らうに  
一さいおんれは佛性や常任  
をなすといやうは事と況  
りのり

葛蒲池の狼の事



天地の靈運化の巧れは多くもあつた  
ことうれえんら万像一のうてあて  
なりはこらあひなり一云ふ日月のあ  
つた地も草木の生一水のあつたし  
て地を焼あつた一水の冷あつて  
雲を凝ま一水の氣物を凝らみ流るの  
うとしてあつた一多れさうとさひ  
うまの地とうけあつたひの雷鳴も地を  
るひぬあつたあつたううはりいん  
ふひあつたあつたあつた秋のあつた

あつたさむく人れ地物あつた地物  
てあつたの事とを流付てあつたてあつた  
世界いみあつたあつたあつたあつた  
人れ生れ又の死はるさうあつたあつた  
りうくあつたあつたあつたあつたあつた  
一何時あつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた  
は三世あつたあつたあつたあつたあつた  
の料あつたあつたあつたあつたあつた  
いんあつたあつたあつたあつたあつた



の有情ハ神印混化の因と云ふあり  
 ハ腹の内より形とそありて生る者  
 色あきばたぬとて生れ後よあきら  
 のそありてあつて又いつとひれ中  
 より際にもよむされて漸をあつたの  
 形と化して生をわたり難を何うそれ  
 く此業よ引きてそれく此像と云ふ  
 けあふ変化のりのあつて時く此のま  
 う云ふよあはし像と云ふトく此像と  
 まごりて幸あつてそ変化の残りすは像





と愛ほつめや送ふのの睡の憂す  
あやむうーあり勢徳あふ人れ  
されたるうーなり一ちあへい其  
らううなるねあう物お勤して  
かき化さひひとせこあひあり  
さうたあうう禽獣の大怪とな  
ふなり一とせ悟ぐ一前前の必  
郡昔日蒲池の魚へ物れくあて  
人れあひひたしり刻あるあ  
の端たう方へ志して佳後りし  
ふ其目ハ

物れあはやくあてらんまは  
た一く粒中足根廻はは倍  
事をもうありは進退さう  
あくちああわう一たの  
さるぞあうさんと目乃  
あむこの物れあはまの  
ありとせちうと一ひ  
としくおりのひうあ  
と得て後合せば  
とらふらうまを  
と回を  
一とせり



くともなくかけ健一がとばしくまて  
ちよいあら狼一は使ひとこのふ来  
つよあのけふありよあらあじしとどろて別  
のふおなり一残さどころへ一肩車小の  
せてさうげよこしバ残さくと後れ腹  
ふ首こ一入て波乗り一押一六箱なく信  
乃さよふとろつよねは信せん方なく折  
一ふらあられおりの二中を切たらうま  
あり崩れちつて狼どもを惹く海うさう

お夜あけてそ然らんれバ果して半箱  
たの狼一しよの死せう梅孫ら方へ健  
ゆまじばとよひちる房一厨くゆくとそどろく  
ともなくお一う今よ海にたそて上残  
ゆんとうへ一たづのねあじあくすも後  
たふふ道ゆて此あつとぬとらりく  
波まじバ孫ら格ハ後とせさうり一ッあ  
ありちる房乃ひ事をたづのこのそは  
あのゆん人とつうりてんすれバちよ  
かろ狼死一飛らう又こあへなふ

狼一しよの死せう



送る色なきといふの程ふれぬとせむ  
わらわのうらみにては我もなほ  
それゆゑにんげりしもの害にふあ  
ずんば我もこれふらふべし  
膚の親星へ其の心をいづる  
くづてんせすば幸せんといふ  
がわき房縁のへ縁して八幸ふ  
尚幸せよとの男子ありし  
かたはるおのゝ色生きたる  
ひて留る色は公一梅ハ我も  
せむ

娘ハあせうの母それある  
そま(あ)のせんもは  
あつらひまで代考りて  
くは日(あ)の可大計六  
狼あつらひ目縁の  
せむ

今川の渡鳴動は

礼花めを色  
祥あり國  
天げりあり



夫人の感ら時いふあはれは...  
あつらひし事し...  
たべにありんや...  
らや...  
由とほろり...  
と...  
たす...  
や...  
さ...  
身と...

義元...  
我小勝利...  
と...  
ひ...  
たの...  
と...  
二...  
一...  
を...  
は...







く同なれぬあやひ幸なりくバ  
云還より名を辨し終りぬと  
てよりく其身を悟むといひ  
かみん

寶永七庚 九月吉祥か

寅

大坂書百林 坡屋治三郎

る



